わたしのまちづくり

「市民主体のまちづくり」と言われてみなさんは何か具体的なイメージがありますか？
ここでは、主体的に活動している市民を情報課職員が取材して紹介します。

文化の家創造スタッフ

小林（こばやし） 大地（だいち） さん

今回は、文化の家で創造スタッフとして、2022年3月まで8年間活動した市内在住の小林大地さんにお話を伺いました。

情報課職員（以下「情」）：今日はよろしくお願いします。早速ですが、創造スタッフの活動について教えてください。

小林大地さん（以下「小林」）：創造スタッフは、現在音楽担当2人、美術担当2人、演劇担当1人、舞踊担当1人の6人で構成されています。主に文化の家が主催する事業の一部を、専門知識や専門技術でサポートしています。活動としては、イベントの分野ごとにそれぞれの創造スタッフが参加して、イベントの企画制作や出演でサポートをします。例えばコンサートがあれば音楽の2人が、館内装飾や舞台美術を作ってほしいと言われたら美術の2人が担当者と会議をして決めていきます。館内装飾の他にも舞台衣装や小道具の制作、創造スタッフたちが自主的にイベントを企画したりもします。

情：小林さんは館内装飾等の美術を担当されているのに、衣装まで作られるのですか？

小林：裁縫が得意なので、おんぱく（※）というイベントでは出演者や自分たちの衣装も作りました。その他にも子ども向けの工作ワークショップを年に1回行ったり、文化の家を飛び出して外でイベントを行ったりしました。

情：8年もの間、創造スタッフとして活躍されましたが、創造スタッフになろうとしたきっかけは何ですか？

小林：9年前、創造スタッフになる前はなかなか美術の仕事が増えず、美術と関係のない仕事もしていました。このままでは制作の腕も衰えるし、人脈もなくなってしまう…。もっと美術業界に関わりのある仕事がしたい！と思い、文化の家に自分を売り込みに行きました。そこから創造スタッフになる前の年に、たまたまおんぱくに参加できなくなった美術系創造スタッフの代理でワークショップを行ったことや、他のイベントの子ども向けワークショップをやってほしいという依頼をもらったことをきっかけに文化の家との縁ができ、美術系創造スタッフをもう一人増やしたい、と声をかけていただきました。

情：文化の家に自分を売り込むという行動を起こした結果、今があるんですね。今の活動の中でやりがいを感じたのはどんな時ですか。

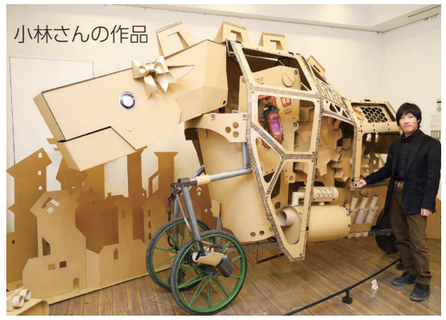
小林：作品を見た職員やお客さんから歓声があがったり、驚いてくれたときにやりがいを感じました。お客さんの驚いた顔や喜んだ顔を想像すると、もっと何か仕掛けを作ろうか、もっと盛り込んでみようか、もっと大きくしてみようかと、ついつい凝りすぎてしまいます。見る人の想像を上回るものを作ることで、見るだけの美術作品ではなく、みなさんが驚きながらもその場にいる人たちと楽しさを共有してもらえるような、リアルな体験ができる美術作品を作っていきたいと思っています。

情：今後の目標を教えてください。

小林：3月で創造スタッフは卒業になりましたが、文化の家やイベントで出会った人たちとのつながりがなくなってしまうのはとても寂しいので、何年かに1回とか、おんぱくとか、文化の家のイベントにまた携わらせていただけたらいいなと思っています。今年度は展示活動やイベントは予定していませんが、来年度から個展などの計画を立て、またみなさんに楽しんでもらえる日が来ることを願っています。

情：市民のみなさんにメッセージをお願いします。

小林：作品はいつも自分のために作っていますが、他の人がその作品を見て魅力を感じて声をかけてくださり、作品を通していくつの間にかたくさんの人とのつながりができました。他人ではなく、まず自分がいいと思うものを素直に作り、自分が100％、200％楽しんで満足してこそ、自分と同じように心が動いた人と楽しさを共有できる関係がつくっていけるのだと、多くの市の事業に携わってきて、そう思いました。


小林さんの作品

情：それでは、最後に小林さんにとって「まちづくり」とは何ですか？

小林：まちづくりにどう関わっていけるのかなと考えると、人との付き合いを大切にしていくことだと思います。長久手も核家族が増えてきて隣に誰が住んでいるかわからなくなってきているように感じています。学力や仕事での成績も大切ではありますが、まず優しい人間関係や心の豊かさを育む時間も人間形成には非常に大切だと思います。その一つとして、例えば絵を見てきれいな色だと感じたり、音楽を聴いて気持ちが良かったり、ダンスや演技を見てかっこいいと思ったり、そんな気持ちを動かす時間を芸術を通して提供できればいいなと思います。

※おんぱく…文化の家全館が音楽のテーマパークとなるイベント

【ながくてまち便り】おんぱく

「Weeklyながくて」でも小林さんの活動の様子を取材しています。

Weeklyながくてはこちら